

女性雑誌『ナチ女性展望』にみる味方と敵の表象

桑 原 ヒサ子

はじめに

「表象に見る第二次世界大戦下の女性の戦争協力とジェンダー平等に関する国際比較」という課題の下に、私たちの共同研究は、主に戦時下の女性雑誌を対象として表象分析を行ってきた。⁽¹⁾私は当時ドイツで発行部数第一位であった官製女性雑誌『ナチ女性展望』*NS Frauen Warte* (1932年7月1日号～1944/45年号)を取り上げ、これまでに表紙のジェンダー分析、母親像や女性の戦時活動についてまとめてきた。⁽²⁾今回は、『ナチ女性展望』が作り出す「味方」と「敵」の表象をテーマに取り上げる。

まず分析対象となる『ナチ女性展望』について簡単にまとめてみよう。この女性雑誌は、ナチ女性のエリート集団であるナチ女性団の機関紙として創刊され、1934年1月1日号からは「党公認の唯一の女性雑誌」と位置づけられた。それは、ナチ女性団の会長職をめぐる権力争いに終止符が打たれ、2月にゲルトルート・ショルツ＝クリンクが全国女性指導者として、ナチ女性団とドイツ女性事業団を始め女性組織の頂点に立つ時期と重なっていた。ショルツ＝クリンクにとっての課題は、強制的同質化によって様々な非ナチ女性組織を統一したドイツ女性事業団をどうナチ体制に取り込んでいくかであった。いざ有事となった時に、銃後が堅固であることは、第一次世界大戦の苦い体験から焦眉の急であった。

『ナチ女性展望』を発行した全国女性指導部の「報道とプロパガンダ部局」は、女性カメラマンや映画制作者を雇い、日刊新聞の編集者たちとコンタクトを取りつつ『ナチ女性展望』のほか何種類かの女性雑誌を発行し、女性問題をテーマとする自主制作映画の上映会、展覧会を開催した。なかでも女性雑誌市場で第1位の発行部数(1939年時点で140万部、女性雑誌市場の4割近くをカバー。第2位の『主婦の雑誌』は57万5千部)⁽³⁾を誇る『ナチ女性展望』は、読者対象であった中産階級の女性たちを啓蒙する最も重要なメディアの一つであった。

ナチ女性の公的信条は良妻賢母であったから、『ナチ女性展望』に取り上げられる圧倒的な数の母親像に比べれば、味方と敵の表象の数は限定されている。一つには、敵・味方の色分けは基本的には戦争と関わっているため、戦争の期間が雑誌発行期間の半分にしかなかったこと、一つには、直接戦争に関わる政治的・外交的領域は女性には開かれていなかったことに起因している。したがって、後者の理由から、味方と敵に関する記事は女性

に関する内容が多くなっている。味方や敵についての記事は外国について知ることができる点で、母親像と比較して数が少ないとはいえ、読者にとっては魅力であったろう。しかし、味方や敵の記事や写真は、言うまでもなく、単に味方あるいは敵である(女性)国民を紹介するために掲載されたわけではなく、むしろ読者を国民社会主義の戦いに組み込むプロパガンダ的意図を持っていた。それゆえ、味方と敵のイメージが明確であればあるほど、プロパガンダの意図もはっきりと浮かび上がってくる。味方と敵の表象分析は、味方であれ敵であれ自国との比較を通して女性たちを啓蒙し、銃後を強化しようとする試みを明らかにすることになるだろう。

それでは、味方とは誰で、敵とは誰なのか。味方としては日独伊三国同盟を結んだ日本とイタリアを、敵としては敗戦後のドイツを分割占領したアメリカ、イギリス、フランス、ソ連、そしてユダヤ人を取り上げる。ユダヤ人は「国」ではないが、ナチスの反ユダヤ主義イデオロギーを考えればここに入れる必要がある。ソ連については、徹頭徹尾ボルシェヴィズムが、ナチスにとってのイデオロギー上の敵に位置づけられていた。したがって、「敵の表象」では、イデオロギー上の敵としてのユダヤ人とソ連、そして敵国としてのフランス、イギリス、アメリカに二分した。

まず『ナチ女性展望』の刊行期間全体における味方と敵の記事の分布を概観し、それから個々に味方と敵の表象を見ていくことにする。

1. 味方と敵に関する記事の分布

1933年1月30日にヒトラーが権力を掌握すると、ジャーナリズムに対する統制と弾圧の嵐が吹き荒れた。しかし女性雑誌に関する限り、家庭生活や職業生活での女性解放論がテーマに取り上げられることはなく、政治上の問題にならなかったため、ナチ当局は編集方針に介入しなかった。したがって『ナチ女性展望』の女性編集部も、第二次世界大戦勃発までは、かなり自由に記事を執筆していたと考えられる。しかし、1939年の開戦と同時に宣伝省に「雑誌ニュース部」と「ドイツ週間ニュース部」が創設されると、女性雑誌の編集内容も細部にわたって統制を受けることになった。さらに、戦況が厳しくなる1943年頃から反ユダヤ、反ボルシェヴィズム色の濃厚な記事を掲載するよう強いられるようになる。

表1の1936年の記事はソ連を除いて、「世界の女性たち」と題して各国の女性を紹介するオリンピック特集である。4ヶ国のほか、中国とトルコの女性についての記事も同時に掲載されているが、日本の記事「極東アジアの女性たち 日本人女性」はトップに置かれ、3頁という最大の紙幅が割り当てられている。11月には日独防共協定が結ばれるが、そのことがあってのことだろう。記事には「転換期にある日本がヨーロッパにも影響を及ぼすようになる」と触れられている。

表1

年号	日本	イタリア	ユダヤ人	ソ連	フランス	イギリス	アメリカ
1932		1	3				
1933			6	2			
1934							
1935							
1936	1	1		1	1	1	
1937				1			
1938			2	1			
1939		1 (5)				1 (4)	
1940		5 (8)			4	5	
1941	2 (7)	1 (7)		5 (7,8)		2 (5,7)	
1942	2		1	3			1
1943		1	3	2		1	2
1944	1		2	1		3	

数字は記事の件数、() 内の数字は何月号かを示す。

表1を見てみると、記事の掲載が政治的出来事と密接に連動していることが分かる。

日独伊三国同盟が1940年9月27日に締結されると、日本が改めて紹介される。1940年のイタリアの5件の記事はイタリア特集である。まだ三国同盟締結前だが、政治的連携は自明のことだった。

ソ連についての「敵」の表象記事は、1939年から40年にかけて独ソ不可侵条約のために控えられているが、1941年6月22日に独ソ戦が始まると、一気に増えている。

フランスの記事は1940年に集中している。フランスとの休戦協定は1940年6月22日に結ばれている。1件の記事は休戦協定前の電撃戦の成果を伝えるもので、3件は9月号と10月号に掲載されている。傀儡政権が樹立すると、フランスの記事はびたりと止まる。

アメリカに関する記事が登場するのは、アメリカに宣戦する1941年12月11日以降となる。

2. 味方の表象

(1)日本

オリンピック特集「世界の女性たち」(第5年度5号、1936年8月)⁽⁴⁾の中の「極東アジアの女性たち 日本人女性」(図1、2)は、まだ見たこともない極東の国の日本人女性を多角的に好意的な筆致で描き出している。緊密な政治同盟(11月25日、日独防共協定締結)が生まれることが決まっていたからだろう。



図1(左)
「ヨーロッパの影響を受けた近代日本にも伝統的日本文化は健在。芸者は高い教養と伝統芸能を身につけ、茶屋で客の話し相手を務める。今日では欧米の作法も習得している」

図2(右)
「現代の日本女性。美人コンテスト第2位の美女」
第5年度5号(1936年8月)

この記者は、日本人女性が抑圧され権利がないという主張は、両性の道徳律がヨーロッパとは全く違っていることから生じる誤解であって、女性は自我を控えることが美德であり、儒教の影響から従順に仕えることが理想とされ、その一方で男性は、女性に奉仕するヨーロッパのミンネの習慣を知らないからであると説明する。「おかみさん」という呼び方は「お上(=神)」に由来し、かつて寵を支配し、財布を預かる重要な人物だった名残である。「かかあ天下」、「入り婿」などの言葉が解説され、恐妻家も多いと日本の夫婦関係の一面がユーモラスに紹介される。さらに、西洋の影響で経済的に自立する現代的な女性は、織機工、郵便局員、鉄道員、バスの車掌、医者、看護婦、学生、教員、速記タイピストとして就労しており(図3)、ヨーロッパではか弱く華奢なイメージを持たれている日本人女性も、剣道、長刀、弓、柔道といったスポーツもする。日本の女性像の偏見から解放される必要があると指摘している。

戦前のこの記事には、日本の女性像をしっかりと伝えようとする努力がにじみ出ているが、第二次世界大戦勃発後の日本関係の記事には、プロパガンダ的傾向が明らかに見て取れる。まず見出しを並べてみよう。「日本人女性の戦時動員」、「日本の家庭生活」、「戦時の日本人女性」、「子どものしつけ」、「日本の国民劇の改作『忠誠』初演」となっている。「戦時の日本人女性」と最後の演劇に関する記事は男性によるものだが、残りの記事はすべて女性が執筆している。その内、「日本人女性の戦時動員」は日本人女性スギノ・シゲコによる。イタリアの場合も、イタリア人女性や『ナチ女性展望』の女性執筆者が担当するケースが多く、「味方」の表象に関しては統制の影響はほとんど見られない。

記事の見出しに戻ってみよう。演劇関係の記事を除けば、日本人女性の果たすべき務めについての記事ばかりである。「日本人女性の戦時動員」(第10年度1号、1941年7月)でスギ

ノは女性の仕事を4点にまとめている。一つ目は、息子を戦場に送る日本の母についてである。息子の「無事の帰郷」を願う母はいない。願うのは「勝利」のみ。それどころか「立派に死んでください！」(ローマ字で書かれ、独訳付き)と言う母もいる。靖国神社で戦死者の名が読み上げられ、後世にその名が刻まれることこそ、家族にとっての最大の名誉である。二つ

目は、女性団体の活動についてである。愛国婦人会、国防婦人会、大日本連合婦人会、東京連合婦人会、関西連合婦人会の名を挙げ、戦傷者の看護、戦死者の遺族の世話、戦場への慰問品の発送、兵士のための洗濯・つくろい、遺族のための職業訓練、就労女性の子どもの世話、保育園の開設、不要品の加工・販売による兵士の家族援助などの活動のほか、「千人針」についても紹介している。三つ目は、弾薬工場や男性がいなくなった職場で、お国のために働く日本女性の姿である。(図4、5)最後に、労働奉仕より重要な戦時の精神的態度を挙げている。夫や息子の戦死に際し、悲しみを見せず、むしろ祖国と天皇のために犠牲を払えたことを誇りに思う態度についてである。

同じ号の「日本の家庭生活」のテーマは、「良妻賢母」である。日本でも「良妻賢母」がいかに

大切な女性の徳であるかを示し、女性の理想像としての「良妻賢母」を改めて意識させる意図があるのだろうが、筆致は決してプロパガンダ的ではなく、執筆者のドイツ人女性は、日本独特の家制度の

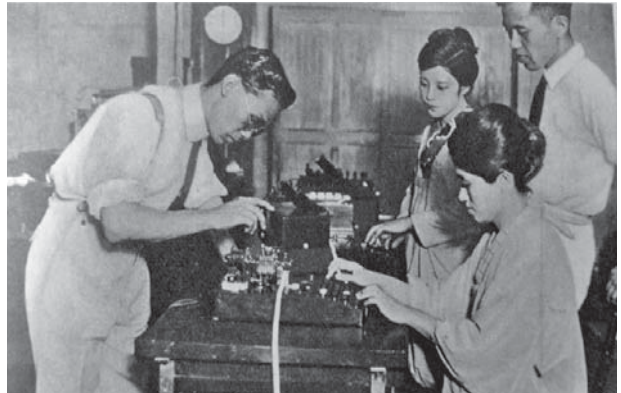


図3 「欧米人女性同様に就労する日本人女性。新型テレタイプ機の研修中」
第5年度5号(1936年8月)



図4 「弾薬工場で」
第10年度1号(1941年7月)



図5 稲の収穫「ここでも働くのは女性だけ」

中の女性を描き出そうとしている。妻は夫の両親の世話をし、嫁として若い頃から、自分以外の家族が食事をしたあとで初めて食事ができることを学ぶ。祖父が家長ではあるが、夫は老いた母からも助言を受ける。しかし、自分も子どもを産めば、同じように生涯、名誉ある扱いを受け、それは死後も続いてゆく。夫の選択は両親に任され、「お見合い」が行われる。女性の就労や西洋的価値観によって大きな変化が起こりつつあるが、個人ではなく、家意識が今なお連綿と生き続けていると、日本の独自性を語る。結婚の幸せは、沢山の子どもを持つこと(図6)。子どもたちは母と、あるいは家族と一緒に、夜でも出かけ、



図6 子だくさんの家族 第10号17号(1942年4月)

映画館へも行く。若い母親は、人に見られても平気で子どもに乳を与えている、と「子ども天国」日本を驚きの目で伝えている。

「戦時の日本人女性」(第10年度17号、1942年4月)では、開国以来、戦争に継ぐ戦争を繰り広げる軍事国家日本が、今また日本の4倍の人口の中国と長期にわたる戦争を戦っており、その長い戦争を女性が支えてきたと強調されている。日本ほど長期ではないにせよ、

1941年冬の戦局転換による対ソ戦の長期化と、ソ連の大軍を迎え撃つという戦況とパラレルな描写である。そうした困難な状況の中で、日本人女性に負けない銃後の守りを要請するために、日常生活の贅沢を排し節約に努める日本人女性、組織化されて銃後を支える割烹着姿の国防婦人会の女性たちの活動が伝えられる。最後に、戦争で夫が何年も家を留守にしても日本人妻は貞操を守っており、これが兵士の精神的抵抗の源になっている。シンガポール陥落も日本人女性の貞操の勝利であると書くあたり、このドイツ人男性筆者は、戦時の夫婦問題に対するドイツ人兵士の不安と願いを代弁しているのだろうか。

日本の青少年教育についての関心に応える記事が「子どものしつけ」(第11年度6号、1942年10月)である。電車では至る所で子どもに席を譲る光景が見られ、神社や寺院で子どもたちが自由に遊び回る「子ども天国」も、就学年齢に達すると、事情は変わる。少年は制服を着用し、先生に礼儀正しく挨拶し、従順と勤勉を身につける。学校のことは教師に任せるとしても、母親は両親に対する従順、誠実、兄弟愛、友情、生涯敬愛し続ける先生に対する敬意などの心を育てていく。娘の誕生は喜ばれず、娘しかない場合は、婿養子を取って息子とする。息子でなければ、犠牲死を果たすことができないという理由が付けられる。少女は兄弟に奉仕し、学校を卒業して人生を始めるのは少年たちである。結婚準備のため

に娘に生け花や茶道を教えるのは母親の務めである。男女別の教育目標、「従順」や「誠実」といった徳育重視の日独共通項を確認している。

最後の記事「日本の国民劇の改作『忠誠』初演」(第12年度8号、1944年4月)の国民劇とは二代目竹田出雲(1691-1756年)の『仮名手本忠臣蔵』を指している。原作を生かしつつ、日本の本質を理解できるよう上演し、倫理宗教的忠誠概念を共通して持っていることを明らかにするのが目的だった。演出はクルト・ランゲンベックで、ミュンヘンのバイエルン国立シャウシュピールで上演された。初演はレジデント劇場で開催され、来賓に、在独日本大使大島浩、在独日本公使、財務大臣シュヴァルツ、大管区長パウル・ギースラーのほか党や国防軍から何人も要人が出席し、儀式的色合いを帯びたという。しかし、この記事は、「兵士たちの揺るぎない態度、大々の戦功、友情など一貫した賛美に値する共通性があるにもかかわらず、知日ドイツ人にとっても、日本の考え方、行動、信仰、伝統は謎の部分が多い」と語っている。日本像を作り上げる上での、これが本音だったろう。

良妻賢母の考え方、女性組織の戦時活動、男性に代わって農村や軍需工場で働く労働奉仕、節約の努力、ゆるぎない精神的態度など日本人女性の姿は、ドイツ人女性に同盟国としての連帯や自分たちの行動に対する自信と責任感を持たせただろう。しかし、女性の着物姿や家制度の中で生きる女性あるいは「子ども天国」についての叙述は、「遠い国」日本を感じさせる。日本の著名な政治家や軍人、ショルツ＝クリンクに対応する日本の女性代表者の記事や写真が一切見られないのは、そうした距離感のせいであろう。いわば、「日本の顔」が欠けているのである。イタリアの場合も、記事や写真のプロパガンダ的利用方法は日本の場合と同様だが、「近い国」であるがゆえに記事の数も多く、ドイツとの比較が容易にできるように表象の焦点が絞り込まれ、「イタリアの顔」がきちんと紹介されている。

(2)イタリア

創刊号から間もない初年度5号(1932年9月1日)にイタリア人女性が執筆した「イタリアの最強の要塞一家族」が登場する。イタリアで母親としての女性が尊敬される基盤として聖母信仰の存在を挙げている。それによれば、伝統の担い手であり、未来の生命の担い手・守り手である。母親を嘲ることは、イタリアではタブーとなっている。「マンマ」という尊敬の念に溢れた呼びかけは、常に聖母マリアへの呼びかけと重なっている。聖母崇拜は、しかし一方で母親が、子どもと家族のため、そしてイタリア社会のために名もなき仕事を果たし、自らの欲求を断念するという犠牲的精神を要求するものでもある、と述べられている。

『ナチ女性展望』では、1935年から36年にかけて失業問題を改善し経済的安定期に入ると、母親像として豊穡・多産を象徴する「地母神」のイメージが登場するが、それまでは、母性

を象徴する聖母像が頻出する。健康な子どもを民族共同体に数多く贈ることが女性の使命ではあったが、失業問題撲滅期には社会的・経済的不安のために、子どもを産む環境は現実問題として整っていなかった。それゆえ、聖母像は理想的母親像を作り上げる手本となったのである。母性を聖母像と重ねる考え方は、この「母の国」イタリアの記事からインスピレーションを受けたのかも知れない。

同じ記事の中で、ムッソリーニが子だくさん家庭に物質的援助を与え、「母と子」という大事業を起こし、社会による子どもの教育に力を入れるなど、家族建設を前面に押し出す施策が紹介されるが、これは、主婦や母親に対する福祉支援活動を展開しようとしていたナチ女性団員に具体的な目標を与え、活動への士気を鼓舞する情報となった。

1936年には失業問題を乗り切り、軍拡路線に舵を切ったヒトラーは、労働力不足に悩み始め、シュルツ＝クリンクに再軍備政策の一環として女性を工場や事務所に送り込むよう命令を出す。『ナチ女性展望』はすでに第4年度16号(1936年1月)で特集「女性向きの仕事」を組んでいる。さらに、オリンピック特集で「ファシズム国家の女性」を執筆したファシスト女性芸術アカデミー協会会長マリア・カステラーニに、イタリア人「女性は、一つには本来の仕事、つまり母親として家庭を守る仕事を省くわけにはいかず、その本来の仕事と もう一つの経済的文化的課題を果たす要請との一致が求められた」と語らせることで、読者に「女性の二重負担」の受け入れを間接的に迫った。

カステラーニはさらに女性ファシスト組織(図7)とその活動を紹介する。①6～14歳、14～18歳、18～20歳に区分された女子青年部は夏・冬の合宿、スポーツ・文化活動を展開している。②女性組織は農業就労団、福祉・看護団など様々な小部局に分かれ、貧困家庭の救済、夫が出征中の家庭支援、虚弱な子どもたちの林間ないし臨海での保養企画、女性労働者の労働条件改善、収穫支援を行う。③救援事業「母と子」は2年半で50万人の母子を世話し、講演会・学校・社会福祉組織の運営を行う。④労働における男女平等。女性就労

者は300万人。女性の職場あるいは女性の多い職場で重職に就く女性も5万人いる。

女性ファシスト組織とその活動内容は、積極的な活動を展開するナチ女性団・ドイツ女性事業団のまるで双子の片割れのようなものである。このことは、『ナチ女性展望』の読者に、良きライバルをファシスト女性の中に発見させることになった。



図7 「清楚できちんとした制服を着る大卒女性たち」
第5年度5号(1936年8月)

オリンピック特集号後、ドイツとイタリアの関係は緊密になっていく。1936年10月25日ベルリン・ローマ枢軸協定、1937年9月27日ムッソリーニのベルリン訪問。この歓迎行事は、外国首脳の公式訪問の慣例を破る大規模な政治的デモンストレーションとして演出された。翌年1937年11月6日にイタリアも日独防共協定に参加。1939年5月22日独伊軍事同盟が締結され、1940年9月の三国同盟締結の前に、第9年度3号(1940年8月第1号)のイタリア特集が組まれる。

その表紙(図8)には、国民に歓迎される両国指導者が並んで歩く姿が写し出され、独伊の密接な関係が表象されている。この男性指導者たちの写真に相応するように、ショルツ＝クリンクの立場に相当する女性ファシスト指導者マルケーザ・オルガ・デル・ヴァジェロのポートレート(図9)も掲出されている。

ムッソリーニの写真はほかに3枚あるが、顔写真の掲載は、イタリアに対する親近感を強める効果があった。これは、同じ同盟国でありながら、「遠い」日本民族ゆえに日本を代表する人物のポートレートが欠如しているのと対照的である。

イタリア特集の中で特徴的なイタリア像は、古代ローマ帝国の発展と捉えられているイタリアの「帝国主義」である(「イタリア帝国主義」)。『ナチ女性展望』の女性記者がイタリアの植民地リビアを訪問し、10枚もの写真を含む記事「イタリアの植民地リビア」を執筆している。彼女の文章に信憑性を与えているのが、多数の記録写真である。古代ローマ遺跡の写真がリビアのイタリアへの帰属を保証し、バルボが短期間で素晴らしい街を建設したことが写真によって証明される。イギリスとフランスによる暴力と搾取による資本主義的植民地主義とは異なり、イタリアが現地人との友好関係を築くために、病院、学校、衛生施設など社会的・経済的・文化的支援をしていることが強調される。



図9 第9年度3号



図8 第9年度3号(1940年8月第1号)

こうしたイタリアの植民地政策記事は、ポーランドに作り出したドイツの「生存圏」の正当性を保証し、民

族上のドイツ人(在外ドイツ系住民)の帰還と入植政策の旗振り役を果たしていることが分かる。つまり、記事や写真によって作り出されたイタリア表象は、イタリアの植民地政策を伝えるだけでなく、むしろ『ナチ女性展望』の読者であるナチ女性団・ドイツ女性事業団の女性たちに対して、軍事同盟者であり、またファシズムの経験者・先輩であるイタリアの政策に照らし合わせて、国民社会主義政策の正しさを確信させ、その政策への積極的支持を求める意味があった。

同様にイタリア特集の「ドイツ人女性と同様、イタリア人女性も民族に奉仕する」と翌年の「国家に奉仕するファシスト女性」(第10年度1号、1941年7月)は、見出しを見ただけでイタリアの女性表象の意図がはっきりと了解できる。もちろんオリンピック特集とは異なり、戦時色が濃厚である。出征した男性に代わって、軍需工場、交通機関、消防で働く女性たちや、内務省の通信業務や軍務に就く女性も紹介される。女性組織の活動内容も、兵士やその家族の精神的な世話、出征する兵士への贈り物、前線小包(暖かい下着、マフラー、靴下、手袋)の作製、傷病兵の世話などが列挙されている。ドイツでも、開戦の1939年から17~25歳の独身女性全員に半年間の労働奉仕義務が課され、農村奉仕が重要な活動の柱となったが、1941年には期間は一年に延長され、国防軍司令部、官庁、病院、運輸業務など直接的な戦争遂行業務にも動員される段階にあった。

イタリアの表象は実質的にはこれで終わる。少し間を置いて、第11年度18号(1943年8月)に「60歳の誕生日を迎えたドゥーチェ」の記事があり、ムッソリーニの経歴が詳細に紹介される。しかし、記事は過去のものばかりで、最後に短く「ドゥーチェと総統はここ何年来、深い友情で結ばれており、1940年6月14日からムッソリーニとその国民は、私たちの国家とともに両民族の生存権をかけてボルシェヴィズムという世界危機を撃退すべく戦っている」とだけ付け加えられている。1941年にはアフリカにあるイタリアの植民地はイギリスに奪われ始め、弱体イタリア軍は戦果を挙げられなかったから、威勢のいい記事は載せられなかっただろう。雑誌の準備から発行までに要する期間のため記事には間に合わなかったが、ムッソリーニは誕生日前の7月25日に失脚し、イタリアは1943年9月3日に連合軍に無条件降伏し、ドイツに対して宣戦を布告した。

3. 敵の表象—1

(1)ユダヤ人

第一次世界大戦では、ドイツ軍は戦場では負けていなかったのに、国内の社会主義者や共産主義者による裏切りで降伏に追い込まれたのだ、という「背後の一突き」伝説が流布した。このデマゴギーにより反ユダヤ主義は再び勢いを増すことになる。社会主義指導者の多くがユダヤ人だったからである。社会主義者によって支持されたヴァイマル共和国は、

ドイツにとって屈辱的なヴェルサイユ条約を受け入れたうえ、ユダヤ人にヴァイマル憲法を通じて完全な市民的同権を与えた。ヴァイマル共和国打倒を目指すナチ党と同様にほかの保守党も、ヴェルサイユ条約破棄、ボルシェヴィズムに終止符を打つという点では共通の政治観を持っていた。しかしナチ党は、この他にもアーリア民族を中心に据えた民族主義と反ユダヤ主義を前面に押し出した。

1920年にヒトラーを中心に編まれた25ヵ条の綱領には次のような条項が含まれている。「民族同胞のみが国民たりうる。宗派にかかわらずドイツの血を引く者のみが民族同胞たりうる。ゆえにユダヤ人は民族同胞たりえない」(第4条)、「我々は、国家がまず第一に国民の生活手段に配慮することを約束するよう要求する。国家の全人口を扶養することが不可能であれば、外国籍の者(ドイツ国民でない者)は国外へ退去させられる」(第7条)。ユダヤ人排斥はこうして明記され、ユダヤ人は次第に殲滅されるべき「敵」に変貌していくことになる。

『ナチ女性展望』のユダヤ人関係の記事は、表1を見ると分かるように3つに分散している。第一が1932/33年の記事で、ほとんどが女性記者によって書かれている。戦時統制のない時期なので、ナチ女性のユダヤ人に対する闘争方法をよく理解することができる。事件としては1933年4月1日のユダヤ人商店ボイコットが中心にある。第二は、1938年11月9日夜から10日未明にかけてユダヤ人住宅、商店、シナゴークが襲撃・放火された「水晶の夜」事件をめぐる記事である。第三が1942~44年の記事で、イニシャルのために性別が分からないものもあるが執筆者は専ら男性で、戦時統制記事であることが窺われる。1942年1月20日、ヴァンゼー会議で「ユダヤ人問題の最終解決」が合意され、また戦況の悪化は不気味で下等な民族としてのユダヤ人像を作り出してゆく。

1932/33年の記事の見出しをいくつか見てみよう。「百貨店—ドイツ中産階級の没落」(初年度3号、8月1日)、「コピーター灯下の期末大売り出し—現代におけるモードとユダヤ人」(初年度13号、1933年1月1日)、「4月1日午前10時にユダヤ人商店のボイコットが始まる」(初年度20号、1933年4月15日)⁽⁵⁾、「暴利とユダヤ人に対する戦いにおける女性の武器」(同前)。この時期の記事には、ユダヤ資本の百貨店やユダヤ人商店での買い物控えるよう読者である女性たちに警告する記事が突出している。

ベルリンに初の百貨店ティーツが開店したのは1882年だった。1885年にヴェルトハイムが続き、その後もカールシュタット、アルスベルクとユダヤ資本の百貨店の開店が続く。1929年の経済後退期にも百貨店は売り上げを伸ばし、その煽りでドイツ人の小売店は倒産、閉店の憂き目を見た。ドイツ中産階級の没落である。「百貨店—ドイツ中産階級の没落」はこう振り返り、この状況を招いたのは、全国民収入の80%を支出しているドイツ人女性・主婦の責任であると糾弾する。

百貨店はクリスマスや復活祭などの祝祭や、誕生日、堅信礼や銀婚式など贈り物をする機会を捉え、流行を作り出しては、ラジオなどの宣伝手段を使って大々的に宣伝する。ドイツ人女性が百貨店の輝くショーウィンドーの魔力に屈しやすく、クリスマス・ツリーが点灯され、クリスマス・ソングが流れていると、百貨店で買い物をしてしまう女性心理をユダヤ人はよく理解している、と分析してみせる。しかし、600万人の失業者がいる今、民族の同志であり兄弟姉妹であるドイツの小売商を助け、ドイツ経済全体を正常化するために、「私たちナチ女性団の女性たちは、百貨店に対する徹底的な闘いを私たちの重要な経済的使命の一つと考える」と宣言している。その翌月の初年度5号(1932年9月1日)には「女性たちよ、百貨店を避けなさい！」のアピールが大書されて掲載されている。

「コピター灯下の期末大売り出し—現代におけるモードとユダヤ人」も百貨店を避けるべし、の内容である。ユダヤ人のモード雑誌に新モードが出れば、生産者は供給のために大量の服を生産する。しかし、またすぐに新しいモードが発表され、生産者のもとにある余った服は百貨店に安値で買い取られ期末大売り出しが開かれる。しかし、それでは生産者は大損することになるため、工場主は損失を埋め合わせるために、ドイツ人労働者の賃金を削る、と経済的システムを解説した上で、百貨店で買い物するという事は、ユダヤ人によるモードの陰謀に加担し、ドイツ人労働者の賃金を下げることになること、さらにユダヤ人には価格の50%が利益になっていることを忘れてはならないと忠告する。

百貨店のボイコットを闘争と位置づける記事の間を埋めるように、「ドイツの主婦はドイツ製品を買おう！」(初年度1号、1932年7月1日)、「ドイツの卵を買ってください！」(初年度16号、1932年2月15日)、「卵を買う際に何に注意しなければならないのか」(初年度19号、1933年4月1日)の卵関連記事がある。これらの記事には「ユダヤ人」について表立った言及がないため、表1の数値にカウントしなかったが、実際は農産物を扱うユダヤ人卸・小売商のボイコットを意味した。

1933年のベルリンは世界最大の工業都市の一つであり、国際商業の中心地であり、ユダヤ人の経済メトロポリスだった。ベルリンには全国の株式会社の四分の一が集まり、ドイツのユダヤ人(全人口の約1%)の三分の一がベルリンに住んでいた。銀行、既製服製造業、百貨店を始め、卵、穀物、皮、金属、家具産業、繊維や靴工場、ラジオや電気製品、それに薬品産業の領域でユダヤ人の存在は大きかった。ベルリンの小市民地区には何代にもわたってユダヤ人の卵輸入卸・小売商が数多く住み、商売を拡大していた。しかし、1933年以降の「血と土」のイデオロギーによって、ユダヤ人の卵業界は新しい秩序と「職業浄化」のための攻撃対象となった職業の一つだった。穀物取引と同様に、さまざまな農産物の中でも卵は特別な意味を持ったのである。⁽⁶⁾

1号の記事では、ドイツの農業が国民の食料をカバーする能力があるのに、1930年には

ほぼ30億万マルクもの金額が輸入農産物に支払われており、とりわけ輸入卵が市場に溢れていることを指摘し、正しい買い物をするよう主婦に訴えている。16号では、考えなしのドイツの消費者のせいで、ドイツの家禽産業が崩壊寸前だと厳しく非難し、「外国製品を買う者は外国人に利益を与え、ドイツ製品を買う者はドイツの労働者にパンを与える」のスローガンを掲げ、失業している民族同胞のことを考え、祖国への義務を遂行するよう警告している。19号では、輸入卵には原産国が分かるようにマークを添付する措置が取られることになり、イラスト入りで周知徹底が行われる。20号の「暴利とユダヤ人に対する戦いにおける女性の武器」も同様に国内農産物を外国農場からの大量品と区別できるよう「認識マーク」や「保護マーク」が導入され、ユダヤ人の製造物や外国農業製品の不買対策が取られたことが報告されている。そして、1933年4月1日、突撃隊が組織したユダヤ人商店のボイコットが行われる。

「4月1日午前10時にユダヤ人商店のボイコットが始まる」には、外国のユダヤ人がドイツとドイツ政府を世界中で蔑み、世界中をドイツに敵対させようとプロパガンダを展開しているため、ユダヤ人に勝つために経済的ボイコットが選ばれたと理由が書かれている。「ユダヤ人の店には1グロッシェンたりとも支払ってはいけないし、ドイツ人女性あるいは家族のためにユダヤ人医師、ユダヤ人弁護士を使ってはいけない」、そして、「今この時だけでなく、永遠にユダヤ人は私たち民族と国家から締め出されなくてはならない。ドイツはドイツ人のために」と過激な言葉で結ばれている。

初年度に見られる一連の記事は、ユダヤ人を経済レベルでの敵と捉えていることが分かる。他民族の国家に入り込み、持ち前の商人気質を生かして自分たちだけが利益を上げ、その国の人々を破滅させる人々というイメージである。ドイツ経済を一刻も早く正常化させドイツ人の失業問題を乗り切るために、ドイツ製品の購入を訴える記事ばかりである。行き着く結果は同じであっても、人種学的根拠からユダヤ人商店をボイコットするのではなく、失業で困窮する民族同胞を助けるため、祖国のたを理由にした方が、不買運動を展開する女性たちには分かりやすく、精神的にも楽であったろう。

この種のユダヤ人に対する記事は、ここで終わる。4月1日のボイコット以後、女性たちがユダヤ人商品の不買運動をしなくとも、ナチ指導部による暴力的措置が始まったからである。ユダヤ人企業や商店は市場価格よりずっと低い値段で店を非ユダヤ人に売り渡さなければならなかった。1935年に大量排除過程は頂点を迎え、1937年から38年にかけてユダヤ人の卵卸・小売業者および穀物卸業者はベルリンから姿を消した。ナチ女性団は、強制的同質化によって誕生したドイツ女性事業団と共にさまざまな社会福祉事業を軌道に乗せることに専念し始めていた。

1938年の二つの記事「永遠のユダヤ人」(第6年度15号、1938年1月)と「かわいそうなユダ

ヤ人」(第7年度13号、1939年12月)は、ナチ指導部の反ユダヤ政策に対する自己弁護の記事といえる。

「永遠のユダヤ人」(図10)は、反ユダヤ主義がナチスによって捏造され迫害が行われているというユダヤ系新聞に反駁するために書かれた、『ナチ女性展望』に掲載された初めての総括的ユダヤ人論となっている。第三帝国が初めてユダヤ人問題を法制化してユダヤ民族を分離したことは認めつつも、それが宗教的理由ではなく、ユダヤ人の宿主民族への順応や同化によって、本来の国民の不幸が表面化したからだと主張し、自国民を保護するために古代ローマ時代以来行われてきたユダヤ人迫害を時系列的に列挙し、ユダヤ人が金貸しとして出世し、18世紀末から法による自由を獲得し始めたために、ヨーロッパの中央に位置するドイツが最もユダヤの寄生民族の影響を受けたと詳説する。そもそも、この記事は外国新聞の論調にドイツ国民が影響されることを恐れての、ナチ指導部の反ユダヤ主義の正当化なので、最後には、読者の記憶にも新しい「歴史」の中から、背後で糸を引くユダヤ人によって1918年の革命が引き起こされ、ヴェルサイユ条約によってドイツが陥った奴隷状態を思い起こさせ、ユダヤ人に対する憎しみを煽っている。



図10 第6年度15号(1938年1月)

記事のタイトル「永遠のユダヤ人」Der ewige Judeがユダヤ文字で書かれ、ユダヤ人の風刺画が添えられている。長いヒゲにかぎ鼻という典型的容貌のユダヤ人が、これもまたユダヤ人を特徴的に示す黒いカフタンを着用している。右手には「高利貸し」の職業を象徴する金貨を、左手には非情に人々を搾取する象徴として鞭を握っている。ドイツのボルシェヴィズム化を企んでいる証拠として、ボルシェヴィズムを象徴する「鎌とハンマー」が重ねられたドイツ地図と思われる石板を小脇に抱えている。ボルシェヴィズムを操るユダヤ人指導者という理解から、ヒトラーによって「ユダヤ・ボルシェヴィズム」という造語が作られた。

ここに見られるように、歴史上の出来事の引用は、自らの主張に客観性と真実性を付与する目的で、とりわけ「敵の表象」に使われる常套手段の一つだった。

「かわいそうなユダヤ人」は、1938年11月9日夜から10日未明にかけてナチ党員と突撃隊によってドイツ全土のユダヤ人住宅、商店、シナゴグが襲撃、放火された「水晶の夜」事件直後に掲載された。なす術のないユダヤ人が逮捕され、ユダヤ人の建物が破壊され、民族同胞の中には、同情し、理解できないと頭を振り、「かわいそうなユダヤ人」と言う人もいるが、ユダヤ民族が力を持っていた時、とりわけ1918-33年にドイツの財産に対するユダヤ人による徹底的な略奪に比べれば、建物の破壊や、ユダヤ民族に対する何10億マルクの課徴金などわずかな金額でしかないと、同情無用論を展開している。しかし、裏を返せば、こうした弁解記事を書かなければならないほど、ユダヤ人に対する暴力的示威行為を快く思わないドイツ人が数多く存在したということでもある。⁽⁷⁾

ドイツ本土ではほとんどユダヤ人の姿は見られなくなった一方、チェコスロバキアやポーランドへの領土拡大によって数百万というユダヤ人を抱え込むこととなった。出国政策では対応しきれず、隔離政策が取られる。ポーランドに複数のゲットーが作られるが、1942年1月20日の「ユダヤ人問題の最終解決」の内容が合意されると、隔離政策は絶滅政策へと変わっていった。しかし、『ナチ女性展望』には強制収容所や絶滅政策などのネガティブな記事は一切載っていない。

「東方ユダヤ人」(第11年度6号、1942年10月)はゲットーからのレポートである。ゲットーでは発疹チフスや梅毒などの伝染病が蔓延しているが、それはユダヤ人が身体を清潔にすることを嫌って監視人に賄賂を渡してまで定期的入浴を逃れるほど「不潔な民族」であるからだ、と説明されている。そして、最終的にユダヤ人は「ばい菌」として表象される。「ユダヤ人が女性について考えていること」(第12年度1号、1943年9月)では、ユダヤ法では非ユダヤ人女性に対する強姦は禁止されておらず、姦通ともみなされていないこと、また売買春周旋屋はユダヤ人が多いことなど、読者の女性を恐怖させる道徳的にも「不潔な民族」の印象を焼き付けようとする。

戦中のユダヤ人像は、このような東方ユダヤ人の、ユダヤの伝統を守る謎めいた民族というイメージから生まれる極度にネガティブなユダヤ人像と、それとは対照的に、富豪のユダヤ人が権力を用いてイギリスやアメリカを操るというイメージが並存する。後者のイメージは、後述する「ユダヤ人に操られる」イギリスとアメリカの表象と連動するものである。このイメージをつくり出しているのが「ユダヤ人の攻撃」(第12年度2号、1943年10月)と「死の商い」(同年度10号、1944年6月)である。前者の記事では、金権主義であれボルシェヴィズムであれ、敵国の背後に隠れて戦争を操っているのは世界ユダヤ主義(図11)であって、敵国の兵士は不条理な戦争のために命を落としている。目を覚まして、三国と理解し

合うことが正しい道であると力説する。後者の記事では、アメリカでは参戦後に、46,000人も100万ドル長者が増えており、その90%がユダヤ人であるとのデータを提示し、戦争で儲けるユダヤ人像を描き出している。(図12)



図11(左)「私たちの敵軍の背後には扇動者であるユダヤ民族がいる」 第12年度12号(1944年8月)
ユダヤ・ボルシェヴィズムを象徴する大男にアメリカの象徴アンクル・サムとイギリスの象徴ジョン・ブルが戦争へと駆り立てられている。
図12(右)「ニューヨーク株式市場の考え方『あなたは戦争で息子を一人失っただけだが、私たちは全財産がかかっているってことを考えてくれ』」 第12年度10号(1944年6月)

(2)ソ連

「3. 敵の表象－1 (1)ユダヤ人」の冒頭で述べたように、反ボルシェヴィズムはナチ党のイデオロギーの一つだった。表1で明らかなように、独ソ不可侵条約によって敵の表象記事は一時登場しなくなる。しかし、ナチスのイデオロギーは、最初からロシア人をユダヤ人よりは上ながらポーランド人よりは下位の劣等民族と位置づけ、ソ連を「生存圏」の一部として領土拡大の対象としていたことを考えれば、この条約がドイツにとって東西二つの前線の成立を避ける現実的外交政策でしかなかったことは明らかだった。

独ソ不可侵条約締結までは、イデオロギーとしての悪魔的ボルシェヴィズムを喧伝する記事が続き、民族としてのロシア人の顔は見えにくい。開戦後は、軍医や従軍記者の冷静な目で見えた客観性の高いレポートによってソ連の人々の姿が見えてくる。そして、スターリングラードの敗北後は、ボルシェヴィズムから「ヨーロッパを守る」ドイツの防衛戦という戦争の新たな意味づけと共に、再びボルシェヴィズムの悪魔的イメージが現れる。

戦前の記事では、ボルシェヴィズムの残酷さ、破壊的所業、ボルシェヴィズムが支配する国の悲惨なイメージを作り上げ、国民社会主義の努力と短期間ながら国民社会主義がな

しえた建設的仕事を対置しようとしている。初年度17号(1933年3月)の記事「ボルシェヴィズムとキリスト教」は、ボルシェヴィズムが宗教的結びつきの時代に尺度とされた英雄的なものや神聖なるものといった最も高貴なものの意味を認めず、生存競争と賃金だけを問題として世界観の平凡化を招いていること、ボルシェヴィズムは「神」と戦う宗教と化しているため、至る所で教会爆破や聖職者殺害を犯していることを暴露し、ヨーロッパのコミニズムも、理論から実践へ、抵抗から支配へ移されれば、ロシアの「悪魔信仰」に変わるだろうと警告する。

1930年にコミニストの夫と理想を胸にソ連に移住した女性が、食糧不足、不潔な病院、麻酔を使わぬ中絶、妻の承諾を得ずに離婚・再婚を許すソ連での絶望的な体験を綴った「ソビエト地獄の中のドイツ人女性—ロシアから戻った労働者の妻の苦悩の道」(初年度17号、1933年3月)は、共産主義女性・女子青年同盟会員に対する警告という形を取っているが、『ナチ女性展望』の女性読者にボルシェヴィズムに対する深い嫌悪感を与えるよう意図されている。「ソ連の結婚と家族」(第5年度10号、1936年10月)でも、結婚が簡単に決められ、その一方で重婚、近親婚、未成年者との結婚などおかまいなしの事実婚が蔓延している現実、夫婦別姓、同居もする必要はなく、離婚も一方の気持ちだけで決定できるといった内容を通して、コミニズム革命が、これまでのブルジョア的生活、市民家族や結婚形態の解体を目指していることが紹介される。これは、良妻賢母として家庭を守ることを理想とし、その啓蒙活動を展開しながら、主婦・母親業の専門化のために組織的に講習会を開催していたナチ女性たちの敵愾心を煽る内容だった。

第5年度15号(1937年1月)の「別な顔」は、ボルシェヴィズムのプロパガンダに反して、いかにソ連の住宅事情が酷いものかを伝えている。すなわち、国営旅行社イントゥーリスト仲介の外向けホテル以外は、南京虫や鼠、水不足に悩まされる宿泊施設ばかり。一家族に一部屋の住宅体制で、窓は壊れ、バケツがトイレ代わり。医者家族は2部屋使用することが許されるが、一部屋は診療室で、患者は廊下で順番を待つ有様であると報告される。住宅供給に邁進するドイツに比べ、ボルシェヴィズム支配下の人々の悲惨な日常生活が浮き彫りにされている。

戦前最後の記事「ユダヤ人の世界改革の旗印」(第6年度15号、1938年1月)は、スペイン内戦中に赤軍によって路上で射殺され、数百人もの無実の人々が灯台から海に突き落とされ、寝返らなかったことを理由に200人もの捕虜が船上で殺害された、サンタンダーの悲劇が詳述され、赤軍の残虐性がクローズアップされている。

独ソ戦が始まって最初の記事は、読者である女性向きに「生命を脅かす『ソビエト天国』の女性」(第10年度3号、1941年8月第1号)である。ユダヤ＝マルクス主義は女性をコミニズムに取り込むために、女性の解放、男女平等、家庭という奴隷制度からの解放という

スローガンを作ったが、実際には理想と現実の乖離がいかにか大きいか報告される。それによると、家事は仕事とはみなされず、「男女平等」とは女性にとって、家事をこなした上で、女性も全く男性同様に仕事をしなければならないという意味である。労働手帳や食料切符を手に入れるために重工業で働く女性もいる。しかし、女性労働者に対する保護は存在しない。1938年12月28日に産前35日、産後28日の産休が保障されたが、実際には妊婦は解雇されたり、採用されなかったり、産休を取れば、職場には二度と戻れなかったり、産休を取らないよう迫られたりする、とある。つまり、「女性解放」の言葉で、女性は搾取され、生命を生み出す母性が蔑ろにされるのがソビエトの現実だというわけである。

第10年度4号(1941年8月)の「ボルシェヴィズムの青少年の苦悩の道」は、革命家に親を殺されたり、自由を求めて親元を去り非行化した青少年たち(図13、14)についてのレポートである。筆者は従軍医師で、職業柄、子どもたちの肉体的・精神的健康状態を心配する眼差しが感じられる。青少年たちはボルシェヴィズムの犠牲者として描かれている。同号の「破壊された街路」は戦争の雰囲気伝える稀な記事といえる。とはいえ、掲載された戦利品としてのソ連軍戦車や破壊された物資補給列車の写真が象徴的にソ連軍の「敗北」、国防軍の勝利を伝えていて、読者の嫌悪感をかき立てる戦場の残酷さを伝える写真は忌避されている。文章には、ドイツにボルシェヴィズムをもたらそうとして阻まれたソ連軍の延々と続く放棄された武器や破壊された戦車、トラックの残骸、死骸、捕虜の群…と続く。死骸については、わずかな人数のユダヤ・ボルシェヴィストに唆された人々の無駄死にだとコメントされている。ここにも、先の記事と同様に、イデオロギーとしてのボルシェヴィズムとロシア人を分離して捉え、戦死したロシア兵を被害者として言及している。対ソ連戦連勝の時期の余裕が見て取れる。



図13
「石の上で眠る非行少年。第二次5カ年
計画完了寸前のソビエト」
第5年度10号(1936年10月)



図14
「粗暴と墮落はボルシェヴィズムが培った性
質である。これはボルシェヴィズムの女性狙
撃兵の一人」 第10年度4号(1941年8月)

「ソ連の村はこんな風だ」(第11年度6号、1942年10月)は親衛隊従軍記者による文とスケッチで、カリノヴォ村のぬかるんだ村道に立つみすぼらしい農家やボロを着た子どもたちについて言及されている。しかし、現実を冷静な眼差しで捉えており、驚きはあっても差別的な印象を与える記事とはなっていない。ところが、戦況の悪化は間もなくそうした客観的な視点を喪失させる。第11年度10号(1943年1月)の裏表紙に一等兵による「貧弱な民族—ソビエト天国の農民のスケッチ」が掲載されるが、動物と同居し、ヒマワリの種だけを食し、水がないので満足に洗顔もできず(図15)、ヘア・ブラシの使い方も分からず、日曜日の楽しみはシラミ取り競争といった、ソ連の農民を蔑み、皮肉った4枚のイラストは、「劣等人種」という敵のイメージを作り出している。



図15 「洗顔はこんな風」

1943年1月31日のスターリングラードにおける第六軍降伏後の第12年度3号(1943年11月)の表紙に付されたキャプションを見ると、「生存圏」のさらなる拡大のために開始されたソ連侵攻は、ドイツとヨーロッパを守る防衛戦争という意味づけに変更されている。同年度10号(1944年6月)の裏表紙には、すでに画集『イギリスのイメージ』を出版して最も重要なグラフィック・アーティストの仲間入りを果たしたA. パウル・ヴェーバーの「ロシアのイメージ」の4枚が見られる。ボルシェヴィズムの物質主義を揶揄する画のほか、図16のようにボルシェヴィズムの残酷なイメージの画が並ぶ。



図16 「ボルシェヴィズム政権は、言うことを聞かぬ何百万人もの人々を公的徴用として連れ去った」 第12年度3号(1943年11月)

すでに1941年10月31日にヒトラーは軍需産業における労働力不足を解消するため、戦時経済にロシア人戦時捕虜の大量動員を命じている。これ以降、ロシア人との直接的接触によってプロパガンダとは別の肯定的なロシア人(労働者・女性家事奉公人)像が生まれる。1942年には、ロシア人像に関してプロパガンダが作り出した負の象徴としての敵のイメージは機能しなくなっていた。⁽⁸⁾

4. 敵の表象－2

(1)フランス

オリンピック特集「世界の女性たち」の中の「フランス人女性は自己主張する」を執筆したフランス人女性は、職業をもって社会進出するフランスの女性像を客観的に伝えている。800万人の就労女性のうち300万人以上が、国民生活の源である農業に従事しており、女性労働者もパリだけで40万人いる。鉱山など過酷な条件で就労するケースがある一方、新しい就労観を持ってエレクトロ・メカニクの勉強をする若い女性たちもいる。大学では文学部に約4,000人、法学部に約1,300人、医学部に約1,200人、自然科学に約1,200人、薬学に650人の女子学生が学んでいる。しかし、何と言ってもパリのファッション界で働く30万人の女性たちは「労働貴族」と呼ばれ、ファッション業界は「国家産業」としての地位にあると自負している。

1930年代初期の女性人口中の就業者の割合は、アメリカ17.7%、イギリス26.9%、フランス37.1%だったから、実際フランス人女性の就業率は高かった。しかし、ドイツも1923年～39年まで安定して35%前後⁽⁹⁾で、フランスの数値に近かった。ナチスの「女性は家庭へ」のスローガンとのずれを感じさせる数値である。このフランス人女性についての記事も、同じオリンピック特集のイタリアの記事と同様、ドイツ女性に積極的に就業を勧めるプロパガンダの一翼を担っていると言えよう。

第9年度7号(1940年10月第1号)に掲載されている二つの記事「運命の天秤に乗ったフランス民族」と「2人の女性／2つの世界」は、両方とも男性の執筆者による。後者は親衛隊プロパガンダ委員会の戦場レポーターである。

「運命の天秤に乗ったフランス民族」では歴史を振り返り、いかにフランスがドイツに対する憎しみを抱く民族かを浮き彫りにする。新しいものでは、第一次世界大戦時のフランスの新聞・雑誌に載ったドイツの飢餓を描いたイラスト3枚が紹介される。①やせ細ったゲルマニアが干からびた畑でカブをかじっている脇で、飢えた子が首を吊って死んでいる。②自分の腸を食べている飢えたドイツ人をマリアンネが微笑みながら見ている。キャプションは「ドイツ・ソーセージ」。③子どもが次の食事の肉料理について話している。「次は犬、そして、それから…おじいちゃん。」

こうしてフランス人に対する憎悪を煽ってから、現代のフランス民族を分析する。リベラリズムとデモクラシーによってエゴイズムと物質主義的思考が蔓延し、自分さえよければいいと考える教育がなされているフランス。出生率低下から、若者がいないフランス。フランス人女性とアフリカ、アジア人男性との混血児が増え、民族としてのアイデンティティを失っているフランスが描き出される。

「2人の女性／2つの世界」は、「自分たちの民族のためにアフリカ人との間にできた子



図17 第9年度7号
(1940年10月第1号)

を産むフランス人の母たち」のキャプションが付いた写真(図17)を掲げ、反面教師のフランス人女性に対して、理想像としてのドイツ人母子の写真を対峙させる。さらに、「私たち人間は、なぜ神の摂理が人種を創り出したのかを議論する必要はなく、創造を誤用する者を罰するということを認識すればよい」というヒトラーの言葉を冠することで、この記事はドイツ民族の純血と多産のプロパガンダになっている。

(2)イギリス

電撃戦により、第一次世界大戦の宿敵フランスは驚くほど早く制圧できたが、その後の主敵イギリスはそうは行かなかった。1940年7月10日～10月31日のイギリス本土上陸作戦の前哨戦である航空戦に失敗し、イギリスとの戦いが長期化したことから、イギリスに関する記事は多くなっている。記事だけでなく、ムッソリーニのイタリア以外で表紙に登場するのはイギリスだけである(図18, 19)。

図18は、イギリスへの空爆を開始する直前の号である。スカンジナビア半島の一部は見えるが、敵国は画面に出ていない。「私たちは行く、イギリスを空爆に」というキャプションだけが爆撃機の目的地を教えてくれる。テーマはドイツ空軍の戦意である。電撃戦でフランスを下し、次はイギリスという意気揚々とした気分が伝わってくる。

一方、図19では敵国は地図で、ドイツは国旗で象徴されている。時期的にはロンドンへの大空襲末期だが、先述した航空戦の失敗でイギリス本土上陸作戦は断念していたこともあり、空軍の出番はない。ここには軍需工場とそこで生産される大砲が描かれている。必勝



図18(左)第8年度24号(1940年6月第2号)
図19(右)「工場から労働のリズムが再び鳴り響く。一つの民族の高く握りしめた拳が、イギリスよ、お前を打ち倒す！」
(A. シュミット) 第9年度21号(1941年5月第1号)

を信じて勤勉に工場で働く労働者の様子や決意は、キャプションが補っている。この表紙は、宿敵を打ち倒すためには国民一丸となって「生産戦」に奉仕することが不可欠であると訴えている。この二つの表紙は、自国民の戦意を高揚させるプロパガンダとして「敵」を利用する典型的な例といえる。

それでは、イギリスのイメージはどのように伝えられているだろうか。

戦前の記事では、イギリスは強者の権利を無制限に追求した国として、アメリカ、アフリカ、インド、アイルランドにおいて行った抑圧と残虐行為が紹介される。19世紀中頃の工業化の時期に国内でも同様の政策を取ったため、労働者だけでなく、子どもも女性も過酷な条件下で労働させられ、支配層の金と欲の犠牲になったと説明される。現在においても、妊婦や産婦への保護はなく、文明国のなかで最も母親の死亡率が高い。貧富の差が激しく、ドイツには見られない貧困が支配していて、下層階級の子どもたちのためにすべき援助はあまりに多いと報告されている。

ネガティブな側面ながら客観的に書かれている内容は、イギリスが宣戦布告すると、その叙述方法はがらりと変わる。

「私たちにイギリスの顔を教えてくれる本」(第8年度14号、1940年1月第2号)では、ハンス・グリムの小説『土地なき民』(1926年)から2ヵ所が抜粋されている。題名の「土地なき民」は「血と土」、「人種の純血」、「一つの民族、一つの国家、一人の総統」と並んで、大衆を扇動するナチスのスローガンだった。

主人公のホルネーリウス・フリーボットが南アフリカに移住してブーア人の工場で働くことになる。ドイツの性能の良い道具と彼の創作意欲から工場主には気に入られるものの、

ドイツ人を目の敵にするイギリス人に妬まれ、工場を追い出される羽目になる。二つ目は、南西アフリカの農場が襲われた際に、フリーボットは賊を射殺するが、殺人罪でイギリス人に逮捕されてしまう。彼は正当防衛だったが、ドイツ人だからという理由だけで、イギリス人から死刑を言い渡されるという場面である。

イギリスの帝国主義を批判し、ドイツに対するイギリスの妬みがいかに深いかを子どもに知らせる良本として、母親が子どもに読み聞かせるべき推薦書とされている。

翌月の「略奪国イギリス」(第8年度16号、1940年2月第2号)の記事(図20)は、ミュンヘン新国立ギャラリーで開催される同名の展覧会を周知させる目的で書かれ



図20 「略奪国イギリス」
第8年度16号(1940年2月第2号)

た。展覧会そのものが、何百年にもわたるイギリスの血まみれの歴史を展示し、邪悪なイギリスに対するドイツの正当な戦いを印象づけることを主眼としている。記事はまず歴史家トマス・カーライル(「イギリス人は200年来あらゆる種類の虚偽にどっぷり漬かっている。頭のとっぺんからつま先まで、大海さながら昔ながらの偽善にイギリス人は取り囲まれている」)ら4人のイギリス人の自己批判を引き、ナポレオンI世(「後世の人々がイギリス人に対してとりわけ非難する事柄とは、彼らの遺産である嫌悪すべき教えである。すなわち恥知らずなマキアヴェリズム、根深い不道徳、冷酷な利己主義、人間関係と公正な世界観への軽視である」)を始め4人のフランス人による友人イギリスについての批判を紹介している。誰もが知っている歴史的著名人の言葉はプロパガンダに権威を与えたので、決してドイツだけが批判をしているわけではないという防衛線を張りつつ、これから展開するイギリス批判に信憑性を持たせることができた。

記事は、イギリスが233年という戦争の歳月に12カ国に対して行った49の戦争を概観する。その中からインドとブーア戦争での大量虐殺を写真入りで紹介し、イギリスにとって邪魔な要人をシークレット・サービスが暗殺したリスト(ロシア皇帝パーヴェルI世、アメリカ大統領リンカーンから1939年11月8日のミュンヘン地下ビアホールでのヒトラー暗殺計画まで)が掲げられている。イギリス王家とユダヤ人の密接な関係やユダヤ人に牛耳られている市場、(ナチ時代にユダヤ人陰謀論と結びつけて理解された)フリーメーソンの母国としてのイギリス、ユダヤ人にパレスチナを祖国として与えようとした(その一方で、第一次世界大戦での協力に対して、同時にパレスチナの独立を約束していた)イギリスの例を出して、金権主義的ユダヤ支配層こそ、こうした略奪戦争を引き起こしていると糾弾する。

この記事に限らず、「略奪国」と「ユダヤ人に支配された金権主義」は一貫してイギリスに張られたレッテルであった。

そして、第一次世界大戦で「ユダヤ人に支配された金権主義の略奪国」イギリスが「勤勉で有能な」ドイツ人に対して行った仕打ちを振り返る。すなわち、食糧封鎖によって80万人もの女性と子どもを餓死させたこと。ヴェルサイユ条約により植民地を奪い、名誉も権利も防衛力も自決権も奪い、賠償によってドイツを略奪し、インフレで打撃を与えて700万人もの失業者で溢れかえらせドイツの息の根を止めようとしたことについてである。しかし、そこで総統は立ち上がったのだと、現在の戦争がイギリスに挑む正当な戦いであることを証明し、是が非でもイギリスに報復を与えよという気持ちになるよう、この記事は読者を導いて行く。

本土に英米空軍による爆撃を受けるようになってからの記事が「アングロ・アメリカの悪党空軍—20世紀の文化冒瀆者」(第12年度1号、1943年9月)である。爆撃されたリユー

ベックの大聖堂、ニュルンベルクの市内、ライン川沿いのルネサンス様式の城、ケルンの大聖堂、ケルンの市庁舎の在りし日の姿の写真が掲載されている。破壊された建物の写真を避けたのは、ネガティブな写真が読者の怒りをかき立てるよりも失望と恐怖を与え、銃後の体勢が崩れることを恐れていたことだろう。この記者は、ブーア戦争の空爆と同じように、情け容赦なく女性や子どもを殺害する残忍なテロ集団としてのイギリスの罪状を厳しく追求している。

スターリングラードで戦局は転換した。戦況の悪化によって、敵の表象は残虐性や醜悪さを増幅させ、邪悪な敵は必ず恐ろしい最期を迎えることを示して、必勝の信念を捨てることなく最後まで犠牲的精神をもって闘い抜くよう国民に訴える記事が登場する。図21と22は、第12年度5号(1944年1月)にA. パウル・ヴェーバーの「イギリスのイメージ」シリーズから掲載された4枚の絵の内の2枚である。



図21
「最期。おまえの権力もいつかは終わりをみるだろう」



図22
「世界中にデブの搾取者が増えている。彼は巨大なプラムプディングを一人で覆い被さるように食べ、小民族は飢えてテーブルの周りに立っている」

イギリスのジャーナリズムは「ドイツからの声」というプロパガンダ・シリーズの中で、ドイツの主婦が食糧難に喘いでいる一方、イギリスの主婦にはそうした悩みは全くないといった虚偽の報道をしているとし、その嘘を暴くために、「ジャーナリズムに映し出されるイギリスの主婦」(第12年度11号、1944年7月)が掲載される。ここにはイギリスのデイリー・エクスプレス紙と週刊パンチ誌から直接、イギリスの主婦の日常的困窮を伝えるイラストを転載している。敵の新聞からの直接転用は、内容の真実性を保証するプロパガンダの手法だった。(図23)この時期はソ連軍の反攻に対する不安、ケルン、ハンブルク、ベルリンへの空爆の度重なる体験、食糧配給削減、総動員令などで住民の空気は極度に悪化していたと考えられる。だからこそ、銃後が崩れることを恐れるナチ指導部には、忍耐と努力によって最後まで戦い抜くことを主婦や女性に対して求める必要があった。

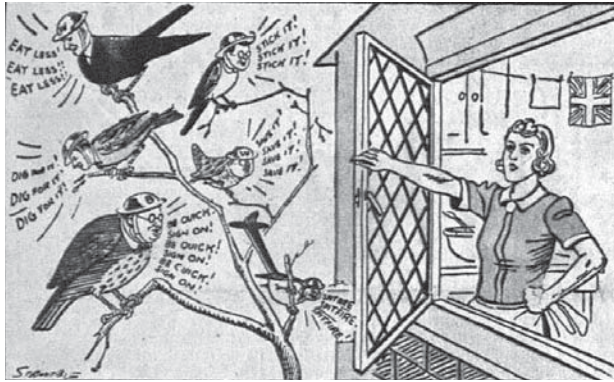


図23
「春になって窓を開けると、財務大臣は『節約～』、労働大臣は『急げ～』、ビーヴァーバックは『スピトファイア～』と新しい空港建設の寄付を乞い、モリソンは『戦い抜け～』と叫び、栄養大臣は陰気そうに後ろに向かって『食べる量を減らせ～』とブツブツ言っている」
第12年度11号(1944年7月)

(3)アメリカ

「アメリカ女性を明らかにする」(第10年度20号、1942年6月)には2枚の写真が添えられている。図24は大統領夫人エレノア・ローズベルトだが、この写真の意味は、前掲の女性ファシスト指導者マルケーザ・オルガ・メディチ・デル・ヴァシエッロの肖像写真と比較すれば一目瞭然であろう。夫人は『ナチ女性展望』の読者を見無視して、姿の见えない誰かと夢中で話をしている。何か良からぬことを画策している邪悪な女性のように見える。大統領夫人として自らの権力欲を充たすために、ユダヤ人から嘘の種を得て、ドイツに対する戦争へアメリカ人女性をけしかけている、と記事は説明する。

図25は女性歌手とデュエットする雄鳥の歌声を流すラジオ番組の一コマ。ドイツの高尚なラジオ番組に比較して、こうした類のプログラムを文化的番組と呼ぶアメリカの文化レベルの低さを強調している。

一般女性のメンタリティについては、アメリカ人女性自らの口から語らせている。パー



←図24

図25

ル・バックを引用し、アメリカ女性は切実な心配事や義務感など持つことなく、箱入り娘として成長し、男性に気に入られ守られる存在になるよう育てられる。冷笑と子どもっぽいロマン主義に支配され、現実体験に欠けるため、精神的空隙を埋めるためにセンセーショナルな出来事を求める傾向にあり、目下は戦争がその役目を果たしていると解説する。

さらに、結婚でも職場でもエレガントで美しくなければ、直ちに若い女性と交替させられる。日常生活に目をやれば、缶詰を使った手抜き料理をし、夫に買い物や皿洗いをさせる。子どもの躰に一定の方法論を持たないため、子どもは家庭で絶対的支配者となっている。このように、どうしようもない妻・母としてのアメリカの女性像をこの記事は作り上げている。

第11年度10号(1943年1月)の記事「悪党ローズベルト」でも、ローズベルトはその夫人同様、行動を共にする一握りのユダヤ人グループに操られている人物として描き出される。この記事によれば、ニューディール政策の失敗により、世界で最も豊かな国の一つでありながら、1千万人の失業者を出している。この内政上の失策から国民の関心を逸らせるために、ドイツとは何の敵対関係もないのに、またヨーロッパの状況とは全く関係がないにもかかわらず、アメリカは戦争へ突入した。軍需産業の消費による金儲けで勢力を拡大しようとするユダヤ人が、ローズベルトを戦争に駆り立てているという構図である。

こうして、不要な戦争を行うアメリカ、自己防衛のために国民に戦争という犠牲を強いるローズベルト、そしてそれを操るユダヤ人という三段論法でもう一度、真の敵を明確にしようとしている。

おわりに

「汝の味方を知れ、汝の敵を知れ」は戦時の金言である。戦略を練り、戦術を立てる出発点だからだが、その意味では『ナチ女性展望』の読者にこの金言は必要ない。たしかにナチ女性団はドイツ人女性の国民社会主義的啓蒙に責任を負っていたので、ナチ指導部の「味方と敵の表象」を自家薬籠中の物にしておく必要があっただろう。しかし、『ナチ女性展望』に掲載された味方と敵に関する記事に目を通せば、相手を理解するためではなく、読者である中産階級の女性たちにナチスのイデオロギーを注入し、多様な戦時奉仕を要請し、銃後の戦争遂行の意志を強化するためのプロパガンダの手段の一つであることが明らかになる。当然のことながら、女性読者向けの内容は多い。

味方と敵の表象の中で、女性をテーマとした記事の割合を出してみると、日本が83%、イタリア62%、ユダヤ人47%、ソ連19%、フランス40%、イギリス31%、アメリカ33%である。味方の女性表象の割合は高く、その中に手本を見出し、連帯感を感じ、あるいは競争意識を持ちながら共通の理想としての女性像を確認し、戦況の変化に応じた銃後の戦時

活動に力を尽くそうという気持ちにさせる記事が多い。敵の表象では、ユダヤ人に女性関連の記事が多いのは、初期の不買運動の記事のせいである。その時期を除けば、12.5%に下がる。つまり、反ユダヤ主義、反ボルシェヴィズムは男女の別なくイデオロギー上の敵として攻撃されている。その他の敵国の女性表象は、反面教師として味方の女性表象と同じ効果を狙っている。一方、その他の敵の表象は、ナチスのイデオロギーの正しさを認めさせ、交戦国への敵愾心を煽り、聖戦意識と必勝の信念を植え付けようとするものだった。

味方と敵の表象には、説得力と信憑性を高める方法がいくつか使われている。第一は、写真の利用法である。肖像写真の有無は、同じ味方でも、ドイツから見た日本とイタリアの距離を感じさせた。イタリアとアメリカの場合では、肖像写真のプラスまたはマイナス・イメージを意識した使い分けがされている。また、記録写真は、文章の内容の真正を保証する目的で掲載されていた。写真はありのままを写すので、嘘は言わないという理解に基づいている。第二は、歴史的出来事あるいは歴史上の人物の発言を記事の主張の証明として引用する方法である。誰もが知っている事柄であるがゆえに、否定することが出来ないからである。第三は、敵国の有名人の自国批判の文章やジャーナリズムのやはり自国を批判する記事を転載する方法である。自分で書いているのだから間違いないという訳である。とりわけ敵の表象を作り上げる時には、写真のマイナス・イメージや、ドイツ側の批判や非難の客観性・信憑性を高めるために第二、第三の手法が多用された。

こうして見てきたように、『ナチ女性展望』がどんな「味方」と「敵」の表象をプロパガンダとして作り出し、それは如何なる目的を持っていたかを明らかにすることはできた。しかし、特に「敵」の表象がプロパガンダとしてどの程度浸透し、どこに限界があったかを知るのは難しい。ただ、本文でも示唆したように、自己弁護的の記事の中にナチ指導部の政策と民意との間の亀裂を読みとることはできるし、当時の民意をまとめたナチ党親衛隊保安部の秘密報告書等から、人々が自らの体験を通してプロパガンダとは別のイメージをつくり出していたことや、ナチ指導部の敵に対する極端なイメージ作りや暴力的行為には感情的に付いていけないと感じていた人々が多く存在したことは確認されている。

註

- (1) この共同研究は平成17年～19年度日本学術振興会科学研究費補助金を受け、その成果は平成20年3月に「研究成果報告書」としてまとめられている。共同研究はその後、引き続き進められている。
- (2) 『ナチ女性展望』NS *Frauen Warte* とその表紙にみるジェンダー』『敬和学園大学研究紀要』17号、2008年、199～216頁。「女性雑誌『ナチ女性展望』NS *Frauen Warte* がつくり出す母親像』『敬和学園大学人文社会科学研究所年報』6号、2008年、33～48頁。「銃後から前線まで—『ナチ女性展望』に見る戦時活動』『軍事主義とジェンダー 第二次世界大戦と現在』インパクト出版会、2008年、45～73頁。
- (3) ノルベルト・フライ／ヨハネス・シュミッツ(五十嵐智友訳)『ヒトラー独裁下のジャーナリ

ストたち』朝日新聞社(朝日選書560)、1996年、108頁および110頁参照。

- (4) 雑誌の号数の付け方が特殊なので、簡単に説明しておこう。創刊号が発刊された1932年7月から翌年6月までの一年間を「初年度」という呼び方をしている。しがたって、廃刊になった1944/45年号は「第13年度」ということになる。第11年度から第12年度にかけて発行ペースに乱れがある時期を除いて、各年度1号は7月号となる。発行頻度は「14日に1冊」で始まり、戦争の長期化とともに発行頻度は減少した。初期は年度、号数、西暦、月日が明記されたが、そのうち月日は省略され、第7年度からは「7月第1号」のように、年度の通し号数のほか、その月の何号に当たるかも記載されている。とはいえ通常は月2冊、まれに3冊発行されるだけである。「3週間に1冊」になる頃から「月1冊」へかけては、月ごとの号数表示は消える。このように、発行号数表示はたびたび変わっている。なお、『ナチ女性展望』解題については、前掲『軍事主義とジェンダー』、i～ii頁参照。
- (5) 4月1日の予告記事が、「4月15日号」に掲載され矛盾して見えるが、表示日付号は実際には表示日より早く発売されていた。
- (6) *Verraten und verkauft. Jüdische Unternehmen in Berlin 1933-1945*, Berlin (Aktives Museum) 2008, S.7 u. 36 参照。
- (7) 民衆の怒りの噴出として演出しようとしたナチ党の思惑は外れ、民衆の多くは不安な面持ちで、押し黙って事態を眺めていたという報告が残っている。「住民は強い行動に対して受動的だった」という警察の報告、「国民の圧倒的部分が『正当な民族の怒り』に理解を示さなかった」というフランケン大管区指導者シュトライヒャーの嘆き、「公衆は、11月9日のような政治行動が党によって組織され実行されたことを、党自らの認否にもかかわらず一人残らず知っている」との党最高裁判所の報告が残っている。芝健介『ホロコースト ナチスによるユダヤ人大量殺戮の全貌』中公新書、2008年、58～59頁参照。
- (8) 矢野久『ナチス・ドイツの外国人強制労働の社会史』現代書館、2004年、103～107頁参照。
- (9) 各国の女性就業者の割合については、井上茂子「ナチズム研究における女性史(下)―その成果と課題―」『姫路獨協大学外国語学部紀要』第7号、1994年1月、130頁参照。